演　題　名　　**広がった世界～60年ぶりに家の外へ出た症例について～**

施　設　名　　**介護老人保健施設しおさい**

発　表　者　　**○発表者：鈴木由佳（ケアワーカー）**
共同演者：鈴木孝千代（ケアワーカー）　高田翔（作業療法士）

概　　要

【はじめに】
知的障害によって対人交流に不安があり、約60年自宅から出ずに生活していた症例が、職員や他ご利用者との交流を通して、自宅から外へ生活の場が広がったため報告する。
【症例紹介】
年齢性別：70歳代女性
介護度：要介護2
疾患名：左大腿骨頸基部骨折
既往歴：幼少期に受けた日本脳炎の後遺症による知的障害（1級）
中学校では対人交流が上手くいかず、卒業後から約60年間自宅から殆ど出ることのない生活を送る。
【治療（ケア）計画】
しおさいのご利用を通じて対人交流の不安をなくし、自宅外へ生活の場を広げる。
【経過】
ご利用開始前、ご家族からは対人交流について心配の声が上がっていた。そのため職員が積極的に関わりをもち、好意的に関わって貰えそうな方が近くにいる席にして交流の機会を多くした。しかし、職員や他ご利用者が声をかけても不安や緊張感が強く、頷き程度の反応で発語は殆どなかった。
対人交流に慣れていない症例に対しては、最初は関わる職員を絞った方が緊張しないのではという意見から特定の職員が主に関わるようにした。また、こちらが大切に思っていることが伝わり、安心感を得てもらうためにはユマニチュードの技術が必要と考え、特に「見る」「話す」を意識して接した。こういった取り組みを進めるにつれ、挨拶などをご自分からもしてくれようになり、症例と職員の関係性が深まっていった。
他ご利用者とも職員を介しながら交流を促していくと、徐々に打ち解け会話が増えていった。最初は誘われても見ているだけだったトランプゲームにも、他ご利用者の誘いで嬉しそうに参加するようになった。
症例の変化について連絡帳で伝えると、ご家族からは安心と驚きがみられた。自宅でも食器の片づけをご自分からするなど今までになかった行動も出て、施設利用への不安が解消されると共に症例への印象も変化していった。ご家族からは骨折は大変だったが、施設を利用出来てとてもよかったと感謝の言葉も聞かれた。
【結果】
職員や他ご利用者から大切に思われていることを示し、段階的に関係性を築いていったことで、対人交流を楽しめるようになった。障害によって外の生活を不安に思っていたご家族が、症例の能力を見直す機会にもなった。
【考察】
約60年間限られた環境で生活して、対人交流に不安のある症例であったが、関わる職員を絞って徐々に広げていったことや、ユマニチュードの関わり方を意識したことで、他ご利用者との交流も行え、楽しんで通所利用ができるようになった。ご家族以外から受け入れられた経験が少ない症例にとって、職員や他ご利用者の優しさや思いやりに触れ、安心して対人交流ができたという経験は、自宅の外の生活に目を向けるきっかけにもなった。症例から「買い物へ行きたい」という希望も出ており、さらに地域社会へと生活の場が広がるよう手助けしていきたい。